聖書ギリシア語

織田昭『新約聖書ギリシャ語小辞典』
『新約聖書ギリシャ語文法』
野口誠『やさしい聖書のギリシャ語』

杉山　世民

織田　昭著「新約聖書ギリシャ語小辞典」は、初版が１９６４年１１月に、第２版が１９６５年９月、第３版が１９７６年４月に出版され、３度版を重ねているが、初版が今から３５年前ということもあり、印刷技術という面では時代的な制約を余儀なくされたと言うべきだろう。しかし、内容的には他の辞書では得られないユニークな面が見られ、真剣に聖書を学ぼうとする学徒には有り難い特徴を持っている。著者は、大阪聖書学院で４５年余に亘り教鞭を執ってこられ、現在も、名誉教師として講義を続けておられるが、大阪聖書学院の教室での講義という実践と、アテネ大学での全生活をかけたギリシャ語研究を通して編まれたこの小辞典は、著者の真摯な学的研鑽に裏打ちされた、しかも確信に満ちた滋味深い説明に満ちており、聖書の学徒に新しい発見を体験させるような力を持っている。

この小辞典の大きな特徴の一つは、やはり前置詞の詳細な説明であろう。ここにも、この辞書のユニークな点が見られる。単に例文を挙げるだけでなく、ギリシャ語の前置詞の持つ微妙なニュアンスが聖書の例文と共に見事に説明されている。例えば、εἰς について言えば、その詳しい説明は２ページ半にわたっており、新約聖書の中で用いられているこの前置詞の持つ神学的な微妙な意味合いが、非常に注意深く解説されていて、聖書をギリシャ語で読む者に大変親切に編集されている。深い血を吐くような学問的研究が背後にあるにもかかわらず、ペダンティックなところが一つもないのが、この辞書の特色の一つと言っても過言ではあるまい。それは、また、著者の誠実な学的、かつ信仰的姿勢とも繋がっている。

現在、この小辞典が電子化されつつあることも併せて触れておきたい。東京にある「コンピューター聖書研究会 (CBEC)」という能城一郎氏が代表をしてお

られる会が、「J-BIBLE」という聖書用のソフト(CD)を出しておられる。その「J-BIBLE 2」にギリシャ語が、そして「J-BIBLE 3」にはヘブル語本文が入っているのだが、この「J-BIBLE 2」に、織田　昭氏の「ギリシャ語小辞典」が入れられて発売される予定である。当初、１９９８年の１１月にはすべての入力が完成する予定であったが、Win 98 に対応するために時間がとられているらしい。

この「J-BIBLE 2」に入っている織田　昭氏の「ギリシャ語小辞典」の CD には、およそ１００語の単語が選ばれて、古典式の発音と現代語式の発音の両方が録音されてい て、実際に、織田氏が発音されたものを聞くことが出来るようになっている。この１０月に「コンピュータ聖書研究会」の能城氏が、依頼されて「日本聖書学研究所」で「聖書学とコンピュータ(新約篇)」という題で講演をされ、このとき織田氏の「音声ファイル」を披露されたそうであるが、反応著しいものがあったらしい。

いずれにしても、このポケット版の「新約聖書ギリシャ語小辞典」は、新約聖書をギリシャ語の原語で読もうとする者にとって、極めて親切で鋭い洞察に満ちた理解を与えてくれる辞典である。基本的には、Alexander Souter の "A Pocket Lexicon to the Greek New Testament", Clarendon Press, Oxford が意識されて編まれたのであるが、見出し語は Souter より多い５６４５語であり、約音動詞の表記の仕方も異なっている。また、語源が括弧で示されているのもその単語を理解する上で大変助けになり、有り難い。

この小辞典の持つ魅力は、真剣に新約聖書をギリシャ語原語で読もうとする者には明白である。著者自らが「願わくは、この不完全な小辞典も主の手によって祝福され用いられて、新約聖書原文の生きた理解と信仰のために幾分なりとも資する所あらんことを。」と書いておられるように、そのような著者の深い祈りが、この小辞典に見事に結実していると言っても過言ではあるまい。新約聖書ギリシャ語の辞書編纂という事業によって、日本におけるキリストの福音理解に貢献したいという著者の真摯で、一途な思いと配慮が、この小辞典の隅々にまで行き渡っている事に愛用者は気づかれることであろう。

織田　昭著「新約聖書ギリシャ語文法」は、主に大阪聖書学院で教鞭を執ってこられた著者が、教室での教科書用にと執筆されたものである。経済的理由から、まだ出版に至ってはいないが、出版の折りには、関本　至先生が序言を書いて下さる予定になっていただけに残念なことであった。大阪聖書学院のギリシャ語の教室では、この文法書が用いられており、すでにワープロ入力は済

んでいる。巻末の索引まで合わせると９７８ページという大著である。実は、このボリュームの大きさにこの文法書の大きな特徴があると言わねばならない。ギリシャ語の文法書というと一般的に分かりにくく、不親切というのが当たり前で、「それぐらい自分で勉強せよ。」と言わんばかりの舌足らずが学問的と思われるイメージがあったし、「なぜ ?」と言う問いについては、答えを得ないまま次に進まなければならないのが実状であった。しかし、この文法書は、そのような「常識 ?」を覆すほど、緻密で詳細な説明で満ちており、例えば、動詞組織の格変化についても、なぜ、そのような格変化の現象に至ったかなどの詳しい歴史的過程が説明されており、著者の研究の深さと緻密さとがよく表されている。

一例を挙げてみよう。例えば、ἀνοίγω という動詞のアオリスト形について、なぜ、ἀνέῳξα といったような形が出てくるのだろうという疑問を抱いた人は多くいるに違いない。この文法書では、この動詞が、元々、ἀνὰ + (*F*) οίγω の合成語であること、その単純動詞 οἴγω が、もはや使われなくなり、単純動詞か合成動詞かが一定せず、内加音式の形である ἀνήοιξα が、音量交換を引き起こして ἀνέῳξα となったことなどが詳述されている。

著者は、当学会の名誉会員であられるコンドソプロス氏（自称日本名・近藤三郎氏）と３５年間文通をしておられる友人であるが、アテネ大学時代には、最近、大辞典を出版されて話題になったバビニョティス氏から現代ギリシャ語をレスヒで学び、ア大の言語学教室では、バビニョティス氏やコンドソプロス氏の師であったクルムリス氏からも学んでおられる。実は、このような履歴に、この文法書が極めて精密である所以がある。つまり、当時、考えられ得るギリシャ語文法研究の最高の場所で最高の研究者と共にギリシャ語文法を学んでこられたその研究の成果が、この文法書にはギッシリと詰め込まれていると言って過言ではない。ここに、この文法書の特徴がある。特に統語法（シンタックス）に関する論文は優れている。ただ、９７８ページという膨大さが、本になった時の「仇」になる可能性もあるが、しかし、たいていの場合、それは技術的というよりも販売作戦上の問題であって、ギリシャ語文法を学ぶ者には、却って、この膨大さに有り難さ、価値があることが分かる。

そのような意味で、この文法書は、今までに類を見ないほど、実に詳細で緻密な文法書であって、何よりもそれは著者の研究と確信の深さを表している。このような文法書が待たれていたのではないかと思う。ギリシャ語文法を学ぶ者は時として「なぜ、そのような言語的現象に至ったのだろうか。」という疑

問を心に抱くが、今までの文法書は直接的に答えてくれず、疑問そのものを放棄せねばならなかった。しかし、この文法書は、そのような問いに見事に答えてくれる好著である。この文法書の出版を考えて、随分以前からギリシャ語フォントの開発がなされていたのであるが、急速なパソコンソフトの普及がその開発の独創性を奪ってしまった。しかし、その開発の成果は文法書に先だって出版された織田　昭著「マタイによる福音」(発売元・いのちのことば社、発行元・松本工房) に見ることが出来る。

何より、筆者自身は、この織田　昭著「新約聖書ギリシャ語文法」が出版されることを強く望んでいる者の一人である。アメリカには A.T. ロバートソンの膨大な新約聖書ギリシャ語文法書があるように、日本にも一冊このような詳しい文法書が欲しいものである。それにしても出版会社はただ利益追求にのみ照準を合わせてする判断ではなく、この文法書の独創性と日本におけるこの分野の研究の貢献を考慮して判断できるものであって欲しいものだとつくづく思う。

野口　誠著「やさしい聖書のギリシャ語」(いのちのことば社) は、初めてギリシャ語に触れ、学ぼうとする者の身になって、よく工夫された入門書的な文法書である。著者自身、冒頭でこのように書いておられる。「この本は、古代語である新約聖書のギリシャ語を楽しく楽に学べるように工夫した入門書である。」初めて新約聖書のギリシャ語を体系的に学ぼうとする者は誰でも直面することであるが、その文法的煩雑さに舌を巻いてしまい、興味さえ失いかけるということが多々ある。ましてや、それを教える立場に立たされている者は、どのようにしたら学ぶ者が最後まで興味を失わないで、忍耐強く学ぶ意欲を持ち続けてくれるだろうかと言う、ある意味では「いらぬ心配」までしてしまうものである。そのような意味では、筆者は、著者の配慮心に一種の同感を覚える者である。

動詞組織や名詞組織などの徹底的な文法的暗記習得によって聖書のギリシャ語に立ち向かおうとする一種の「演繹的学習法」を採用すると、実際の聖書のギリシャ語には、いつまで経っても出会えず、無味乾燥に思えて興味を失い、疲ればかりを覚えて、結局、学びを放棄する学生を生むことになる。このような事態を避けようとする意図と工夫がこの文法書には伺われる。たいていの学生は「オレが日本語を話すのは、文法の勉強をしたからではない。」と考え、実際に聖書の言語に直接触れる「帰納的学習法」を望むものである。そして、文法はもういいから実際の聖書のギリシャ語を直接読みたいという衝動に駆ら

れるのであるが、しかし、文法的基礎工事無しでは、いきなり実際のギリシャ語に触れても理解できず、やがて離れ去ることになるのである。

結局、ギリシャ語の学びは、コツコツとした地道な文法的基礎工事無しでは読んで理解することが出来ない。このように、教える立場に立つ現場の葛藤からこの野口氏の「やさしい聖書のギリシャ語」が生まれたのではないかと推測する。著者は、アメリカのペパーダイン神学校で学ばれ、石岡キリストの教会の牧師、また、茨城キリスト教大学の助教授をしておられる。御子息は、旧約聖書のヘブル語を専門にしておられ、お二人の共著もある。

この文法書の特徴は、基本的には、左近義慈氏の文法書に拠っているものの各課の冒頭に聖書の言葉が、いきなり出てくるところに工夫と苦慮が感ぜられる。これは、初めて聖書を原語で学ぼうとする者に「よし、頑張ってこれが読めるようになるぞ。」という闘志をわかせるのに有益かも知れない。その聖書の言葉は、「解説」という形で一応、単語やその発音などが説明され、その後で文法的な説明が施されていて、よくできている。また、各課の終わりに設けられている練習問題も、ほとんど聖書から分かり易い部分が選りすぐられていて、よく配慮されていると思う。

最後の索引を合わせて１８８ページというコンパクトにまとめられた文法書であるから、あまり多くの文法的説明を期待することはできないのかもしれないが、全体として学ぶ者の立場を考えてよく練られ、配慮された仕上がりとなっている。著者が冒頭で書いておられるとおり、その目的に沿った形で文法の全体にわたって見事に編纂されていると言えるだろう。何より、このような親切な文法書が、大いに用いられて聖書を原典で読む者が増えることは、実に願わしいことである。最初に新約聖書のギリシャ語本文を多くの写本から編集しようとしたのは、スペインの枢機卿ヒメネス (Francisco Ximenes de Cisnero) と言う人だったようであるが、１５１４年にすでに、その印刷は終わっていた。そのヒメネス版の序文にこう記されている。「訳文は原文、少なくとも救い主自ら用い給いし国語の意味を十分に、また、正確に表し得るものではない。故に聖書の本源にさかのぼるには、旧約をヘブル語本文により、新約をギリシャ語本文によりて校正し、聖書の本源にさかのぼる必要がある。おおよそ、神学者たる者は、各自、永生にいたるその水を飲み、その源を求め得る人でなければならぬ。我らの目的は、従来、閑却された聖書原文研究を復活するにあり。」先に紹介した書物が、このような意味で大きく貢献していることは、言うを待たない。